

[http://www.engineer.or.jp/c\\_dpt/nucrad/](http://www.engineer.or.jp/c_dpt/nucrad/)

## 原子力・放射線部会

# 会報

～住民目線のリスクコミュニケーション～

## 巻頭言『科学と安全と安心の悩ましい関係』

東京大学大学院  
理学系研究科 教授  
早野 龍五



東京で物理学を教え、ジュネーブの CERN 研究所の実験室に通って反物質の研究をする、そんな生活を続けて 20 年近くなります。

反物質は、役に立たないけれども夢がある研究。しかし、お金がかかります。ノーベル賞を授賞された小柴昌俊先生の言葉を借りると、私も「国民の血税で夢を見させて頂いている」一人ですから、どうすればこの研究を支えて下さる方々に恩返しできるか、いつも気にかけていました。

2011 年 3 月、福島原発事故があったことを知り、当初は自分が状況を理解したいという気持ちから、グラフや地図を交えたツイートを始めたところ、数日でフォロワー数がそれ以前の 3000 弱から 15 万強に急増しました。私のツイートを、首都圏から逃げるべきかどうかの判断材料にしておられた方も少なからずおられました。自分が社会に恩返しする時だと感じました。

ソーシャルメディアは、新聞やテレビのような伝統的なメディアと異なり、瞬時にフィードバックがありますし、世の中にどんな不安や誤解があ

るかを知ることができます。たとえば、給食一食分丸ごとの放射能検査は、ツイッター上で内部被ばくへの不安が強いことを見て、私が国に提案し、事業化されたものです。

しかし、何と言ってもソーシャルメディアの力は、人を結びつけることにあります。私にとっての転換点の一つは、2011 年に福島で内部被ばく検査で苦労しておられたお医者さん方とつながったこと、そして二つ目は、2012 年春の私のツイート「万惣が閉店するのでホットケーキを食べに来た」が糸井重里さんの目に留まったことがきっかけで、「知ろうとすること。」という本が生まれたことでした。

現在、福島県内には 50 台以上の内部被ばく検査装置（ホールボディーカウンター：WBC）がありますが、2011 年当時の台数は、片手で数えられるほどでした。お医者さんは必ずしも放射線測定の専門家ではない。一方、私には放射線測定の技術と知識があった。両者がソーシャルメディア上で出会い、2012 年末までに 3 万人ほどの体内放射性セシウム量を実測し、論文にまとめました。私にとっては初めての医学論文になりました。

結果は、2012 年の段階で、すでに 99% の方々（子どもは 100%）が WBC の検出限界未満、すなわち 1964 年の日本人の体内放射性セシウム量（大気圏内核実験由来）よりも低いというものでした。

この結果は、海外の専門家からも驚きを持って注目され、国連科学委員会 UNSCEAR の報告書にも採録されました。

コープふくしまによる生協組合員の陰膳検査で、放射性セシウムの摂取量が天然放射性物質のカリウム 40 よりもはるかに低いことが示されたこと、1000 万袋以上の福島県産米の全量全袋検査で基準値超えがほとんど出ないこと（2012 年産米で超過は 71 袋、2013 は 28、2014 は 2、2015 は 0）など、その後多くの測定によって、福島の内被ばくが極めて低いことは繰り返し示されています。

それでも、内部被ばくについての不安は根強いものがあります。通常の WBC は 2 分間立って測定する構造のため、立ち続けることが困難な小さなお子さんの測定は行っていなかったのですが、親御さんからは、是非測って欲しいという希望が多く寄せられていました。やはり、他人の数値をいくら見ても駄目だということなのでしょうね。

そこで、子ども専用の WBC、BABYSCAN の開発を始めました。これは、高精度の測定装置であることはもちろん、不安を持ったご家族が測定に来られるわけですから、デザインは極めて大事な要素です。そこで、工業デザイナーの山中俊治さんに開発チームへの参加をお願いし、開発がスタートしたのが 2013 年の春のことです。

デザインのおかげで、BABYSCAN は、検査に来られた方々とスタッフの会話を促す、コミュニケーション・ツールとしての役目を果たせるようになりました。

2013 年の秋に 1 号機を納入、2014 年夏までに 3 台が福島県内で稼働し、これまでに約 5000 人が検査を受けました。大人用の WBC よりも約一桁低い検出限界を実現しているにもかかわらず、放射性セシウム検出者は皆無です。

ところが、福島での農作物や食品の検査、WBC 測定などの結果が、人々の安心につながっているかということ、必ずしもそうではない、ということ、私たちは BABYSCAN の検診を通じて知ることにな

りました。

BABYSCAN で検査を受けたご家族には、摂取している食品のなどを問診票に記入していただいているのですが、南相馬では多くの方が、1) 水道水は口にしない、2) 福島産米は食べない、3) 福島産野菜は食べない、と答えておられます。1, 2, 3 すべてを忌避された方は約 60% です。郡山市やいわき市などでも、その割合は約 50% に達します。これと対照的なのは三春町で、1, 2, 3 すべてを忌避された方は 4% でした。この大きな違いの原因を解明することは、今後の課題の一つです。

福島県内に住んでおられる方の多くは、米の全量全袋検査が行われていることや、内部被ばくが低いということは、ニュースで見聞きしておられると思います。しかし、それら、科学的に示された安全の根拠となるデータは、必ずしも人々の安心とは直結していない。

行政や専門家への信頼が失われた状態で、科学的事実のみを語っても人々の納得は得られないという厳しい状況ですが、科学的事実の究明という科学者の本分は果たさなければなりません。その上で、人々の納得を得るにはどうすれば良いか。皆様はどのようにお考えでしょうか？まだまだ手探りが続く、事故後 5 年後の春です。

#### <プロフィール>

東京大学大学院

理学系研究科 物理学専攻 教授 博士（理学）

原子物理学（特に反物質）

最近の著書に、福島原発事故後の取り組みを糸井重里氏との対談形式で綴った「知ろうとすること。」（新潮文庫）がある。

#### 主な経歴

1979. 3 東京大学大学院理学系研究科修了

1979. 4 東京大学理学部助手

1982. 11 高エネルギー物理学研究所助教授

1986. 4 東京大学理学部物理助教授

1997. 1 東京大学大学院理学系研究科教授

## まえがき

震災から 5 度目の春が来ました。長い避難生活を余儀なく強いられるだけでなく、復興の見通しを得にくい将来、不安な気持ちについては、科学的な説明だけでは、納得できないものがあります。部会報第 18 号では、[今後 10 年の部会活動方針](#)から【第 1 の柱】「安全文化醸成に資する活動」、特に“住民目線のコミュニケーション”に焦点を当てて構成しました。安心した時をひとりでも多くの人が過ごせるよう、伝わる・伝えるためにできること事はなにか、何を伝えていくべきかを改めて考え、前号に引き続き、学び直す姿勢で臨んだ部会活動事例とその状況を、共感した技術士からのメッセージと共にお伝えしていきます。

今後 10 年の活動方針（2014 年全体会議承認）  
 以下 4 つを部会活動の柱に掲げました。

第 1 の柱 安全文化醸成に資する活動

第 2 の柱 技術士の認知度向上と技術士数増  
 に向けた活動

第 3 の柱 部会員の技術士活動の支援

第 4 の柱 広報活動

（詳細を会報最終ページに掲載しました。）

## CONTENTS

- ・ 巻頭言 P. 1~2
- ・ 部会長からのメッセージ P. 3~4
- ・ 日本技術士会理事からの話題 P. 4~5
- ・ <第 1 の柱> 部会活動事例 P. 5~8
- ・ <第 2 の柱> 取組み事例 P. 9~12
- ・ 会員、例会参加者からの声 P. 12~14
- ・ S 幹事（案件と募集、就任挨拶） P. 14~15
- ・ 部会 HP 紹介 P. 16
- ・ 活動の実績と予定 P. 17



## 部会長からのメッセージ

## コミュニケーションとはなんですか？

部会長 佐々木 聡



最近、美術鑑賞がブームのようです。確かに、10 年ほど前は、人があふれかえる展覧会は稀で、静かに鑑賞できる企画がほとんどでした。しかし、最近、熱心な鑑賞者が明らかに増えました。商業的にも成り立つようになり、テーマを被せながら複数の企画が次々と連携し、期待を背景に次の企画が充実する。これまで名前の知らなかった作家の企画であっても、目の肥えた鑑賞者が訪れる。明らかに美術に対する私たちの感覚は鍛えられた感があります。

一方で、美術館らしからぬ小さなトラブルやスタッフの対応に首をひねる場面を目にする機会も増えた気がします。一日数千人の来場者、待ち時間数時間の展覧会では、本来の学芸員や学芸員補のほか、イベント対応のスタッフが急増しました。安全に人の流れを捌くには致し方ないとも言えますが、でも、一日数万人の来場者が訪れるテーマパークのスタッフに不快な思いを感じることはまずありません。相手の心象を左右するのはなんですか？

私たちが原子力・放射線に関する知識を語る時の姿勢を考えてみましょう。

私が就職した頃、原子力・放射線情報を伝えることは広報(public relations)でした。役所に向いた際、研究成果を記者発表する仕事を幾度か経験しましたが、我々に求められたことは、研究者の説明を一般向けに解りやすく翻訳することでした。

所属元に戻って数年後、事業所内で起きた事故対応後の改革のために英国から専門家を呼び、少人数で議論をする機会を得ました。そこで涉外

(external affairs)担当の方が、情報伝達は一方方向ではなく、対話により相手の要望を聞くことが重要と語っていたことが印象的でした。当時リスクコミュニケーションという言葉は聞きませんでした、私の原点になりました。

ところが、何時頃からか原子力の分野で PA (public acceptance) という言葉を聞くようになりました。情報を伝える目的が、賛成して受け入れてもらうことになってしまった。私たちの問題点はまさにここにあると思われまます。

私も含め、多くの専門家には多かれ少なかれ PA の考え方が浸み込んでいると思います。原子力に長年携わってきた人には、信念も自負もある。東電福島原発事故後の発電所外での支援に赴いた人は、こうあるべきとの思いを強く持ち、放射線影響に関する正しい知識を伝えたいという欲求が強く起こったはずで。私もそうでした。

しかし、正しい知識を伝えようとする姿勢、自分の結論に導こうと説得する姿勢は、不快感・不信感を与えて決してうまくいきません。最近、コミュニケーションのテクニックを学ぶ機会も増え、傾聴、相槌を行う相談員も増えましたが、テクニックだけのコミュニケーションもすぐに見破られてしまいます。

事故を引き起こした私たちの痛恨の学びは、放射線影響に関する正しい知識を知っていれば避けられた不幸が多数あったことへの反省であり、被災者の尊厳を傷つけずに済んだかもしれないという反省です。でも、間違っはいけないのは、正しい知識は手段であって目的ではありません。知らないことで、本人の生活や判断を誤った方向に進ませないために、選択するための手段を提供することだけなのです。

さらには、相手の方の問題の本質は、放射線影響に対する不安ですらないかも知れません。そんなとき、私たちが原子力・放射線の正しい知識を伝えることを目的と考えてしまうと、自ずと理解

や共感を期待してしまい、不幸な結果に終わります。言葉や態度の裏にある懸念や不満や不信を掻き分けて、問題の本質を知ろうと努力すること。それはもしかしたら、相手の方も認識していないかもしれない、ゆっくりと一緒に考えていかねばなりません。見返りを求めず、知識を持つ者の義務と考えて対話を行えば、驕りが消え、原子力に携わってきたものの反省が伝わるかも？ 知れません。

大きな美術館には、学芸員とは別にボランティアスタッフによるギャラリーツアーが開かれるところがあります。ご自身でテーマを掘り下げ、自分の言葉で説明する姿からは、この人は絵が好きなんだなあと感じ、絵を見に来ている人への配慮が伝わってきます。老舗の美術館のスタッフからも同じ感覚が伝わってきます。

自分のためではなく、真に相手に寄り添ったコミュニケーション。日本人の得意とする「お・も・て・な・し」に通じるのであれば、我々にできないはずはありません。

#### 日本技術士会理事からの話題

### 理事となって一年

部会相談役 桑江 良明



早いもので、昨年 6 月に理事となって間もなく 1 年が経とうとしています。しかし、何か「理事」に相応しいことが出来たかという、恥ずかしながら未だ「模索中」であり、「理事」として胸を張ってご報告出来る成果・実績はありません。その理由を含めこの一年を自分なりに振り返ってみます。

#### 1. 「原子力・放射線部会」の代表ではない？

ご存知のとおり、理事選挙（正確には「候補者選出選挙」）では、各候補者は各部会／地域本部の



推薦を受けて立候補します。しかし、総会で承認された後、「理事」就任以降は「(部会/地域本部)代表」の肩書はありません。

そのことの意味をどれだけ意識するかは、各理事本人の考え方次第なのですが、私の場合、やはり、過去 10 年以上の原子力・放射線部会での活動を背景に、「部会代表」との意識が強かったため、自分自身の気持ちの整理と切り換えに少し時間がかかりました。

## 2. 改めて「倫理」と向き合うことに

### (1) 「倫理委員会」を希望

理事になるといずれかの常設委員会に属することになります。そして、通常、2 期目の理事がその委員会の委員長に、1 期目の理事が副委員長に就任します。私は、倫理委員会を希望し当委員会の副委員長を仰せつかることになりました。結果的に林前理事(現監事)の後を受けた格好になりましたが、これは、上記「1.」からも明らかなお同一部会で引き継ぐ必要はなく、あくまでも私自身の意思によるものです。私の技術士会活動の原点はやはり「技術者倫理」であるとの思いからです。

### (2) 「倫理教育検討WG」の活動

倫理委員会では副委員長のほかに、新設の「倫理教育検討WG」の主査も仰せつかることになりました。本WGの構成は、倫理委員と登録グループ「技術者倫理研究会」メンバーが半々を占め、大学等で技術者倫理関係の講義経験をお持ちの方が多く含まれています。WGの設置は前体制(～H26年度)で既に決まっており、その設置趣旨に則り実質的には昨年秋から活動を開始しました。

WGに与えられた主なミッションは、「技術士が大学等で技術者倫理の講義を行う場合に参考となる標準教材を作成すること」です。言うまでもなく「技術者倫理」に関しては一人一人が独自のお考えをお持ちで、「正解」を示すことなど出来ません。それを踏まえたうえで、WGではこれまで、「技術士として学生や若年技術者に最低限伝えるべきこ

とは何か」、「(前体制からの申し送り)で) 整合を図るべきとされる日本工学教育協会の『学習・教育目標』の位置づけは何か」、「技術士会内で共通認識を得るためにはどのような考え方・成果物を示せば良いか」等々、改めて根本に立ち返った議論を重ねてきました。ようやく助走期間が終わったといった感じです。正直言って“難しいことに首を突っ込んでしまった”という気持ちもありますが、やりがいは感じています。

## 3. 原子力・放射線部会員として

「理事」が部会の代表ではないことは上記のとおりですが、部会活動がそのベースにあることに変わりはありません。

一部会員として、1月の「安全文化に関する講演と意見交換」の企画に続き、5月から「安全文化フォーラムディスカッション」を新たに立ち上げました。部会員の皆様の積極的な参加をお願いします。(部会HP「[安全文化と技術者倫理を学び直す取り組み](#)」参照)

次回以降、具体的な成果・実績のご報告が出来るよう、目の前の任務に取り組んでいきたいと思っております。

広報担当からのお知らせ：

科学技術社会論研究 第12号(「福島原発事故に対する省察」の特集号)で、桑江理事の記事「原子力技術者は倫理を持ち得るか」が掲載されました。

## <第1の柱> 部会活動事例(1)

### 住民目線のリスクコミュニケーションを考える

当部会では、東日本大震災における福島第一原発事故を踏まえ、活動方針の柱の一つとして「3.11事故の反省・教訓を風化させない働きかけ」、具体的には原子力・放射線部門の技術士が「住民目線のリスクコミュニケーションを考える」への取り組みを掲げました<sup>\*</sup>。原子力・放射線に対する不

信感が根強く残る中、信頼や理解を得ている活動にはこのように「住民目線」が共通して深く関わっており、この経験を共有したいとの思いから進めてきた活動の一部を紹介します。

※[原子力・放射線部会の過去 10 年を振り返っての今後 10 年の活動方針について](#)

#### 活動事例 1 (2015 年 3 月)

福島支援を経験する会員や放射線防護の第一人者の方からの御講演を踏まえた意見交換会を実施しました(第 44 回技術士の夕べ⇒詳細は[こちら](#)、会員の方は[こちら](#))。

これを受けて「専門家」としての、また「人」としての「技術士」は今後どのような活動を行っていくべきかを考えました。この中では、個人が自らの問題意識に置き換えて言葉や行動に移すためには経験の有無が一つの壁であることが分かり、疑似体験を中心とした活動を企画しました。



#### 活動事例 2 (2016 年 3 月)

被災者とのコミュニケーションで苦労した技術士は、信頼回復の担い手は「個人」であること、専門知を一方向で伝えるのではなく、相手の話を聞き、共に考える姿勢(我々はそれを「住民目線」というキーワードで表現しています)の大切さを認識し、ほぼ同じような解に到達しています。逆に、経験のない者の中には、リスクコミュニケーションを広報と考えている場合も多く、両者の溝は、これまでの体験談などの講演形式の CPD では、埋めることができませんでした。住民目線のリスクコミュニケーションとはなにかを考えることを

目的とし、第 49 回技術士の夕べが行われました。

従来の「技術士の夕べ」と異なり、参加者を 3 班に分け、グループで討議・検討した後、ロールプレイ(疑似体験)を行いました。ロールプレイは、東京在住の女性(50 代)が放射線影響に関する事項について、家族が心配という相談を受けた想定で行いました。グループ討議の内容を踏まえ、どうすれば相談者に寄り添っていけるのか、どうすれば相手に伝わるのか、自分が理解している事を言葉にして話ができるのか、個人が対応を考えながら、ロールプレイを進めました。同じグループ内の人の対応からも学ぶこともできる活動となりました。



参加者の声から、認識の変化があったことが認められ、さらに発展させようと考えた方も多かったようです。それらの対応の変化等については、講師からも講評を頂いており、さらに高めるため助言を受けて、実のある企画となりました。

詳しい報告は、部会 HP に近日アップされる予定ですので、そちらもぜひご覧ください。



## ＜第 1 の柱＞ 部会活動事例(2)

### 北関東地区見学と報告会

部会幹事 西村丹子

当部会は、茨城県支部、JAEA 技術士会、神峰技術士会、東北本部福島県支部、防災支援委員会との共催、協力のもと、北関東地区報告会及び見学会を 2016 年 1 月 29 日に開催しました。通算 9 回目となる本会合は、講演、施設見学、各技術士会の活動報告の 3 部で構成され、北関東地区に所属する技術士を中心に 23 名が参加しました。

講演と施設見学では、(株)千代田テクノル様に協力頂き、個人線量計の製造・メンテナンス施設見学の他、Dシャトルの震災当時の働きと福島在住の人々にこれからも期待される役割と効果などについて御講演頂き、住民が望む支援とは何か、事例の御紹介と共に、参加者で考え、意見仕合い、学ぶ一助を得る機会となりました。

Dシャトルを使った高校生による調査結果の海外発表や学会誌、学校HPでの紹介とそのデータの蓄積は、メディアで公表される代表地点での空間線量データと異なり、現在だけでなく、未来に向けての生活や行動への反映に大きく貢献するデータとなることを十分に感じました。

#### Dシャトル：

住民自身の個々の生活や活動と連動して外部被ばくを確認、PCにてデータ管理できる小型・軽量積算線量計、外観は万歩計の様。被ばく量の大小で、自分の明日からの行動計画にフィードバックでき、安心と自信を持った行動を促せるきっかけとなった機材。震災当時、個人全員に渡る数の線量計が無く、また電子線量計は 18 才以上が対象で、住民に合った線量計の開発、製作が課題だったことが誕生の背景にある。

#### (1) 講演

(株)千代田テクノルの狩野好延氏、大口裕之氏、柳田弘氏から 3 つのご講演を頂きました。

狩野氏からは「ガラスバッジによるモニタリングサービス」と題して、放射線作業従事者の個人被ばく線量を測定するためのガラスバッジの構造や測定原理のご説明を、大口氏からは「福島に対する取り組み」において、住民用個人線量計の特長と福島県内外における個人被ばく線量測定結果のご紹介を、また柳田氏からは「トレーサビリティと計測器校正の必要」において、測定機器の校正の重要性や信頼性に係るご講演を頂きました。



#### (2) 施設見学

(株)千代田テクノルの大洗大貫台事業所ラディエーションモニタリングセンターでは、ガラスバッジによる線量測定サービスに関する作業工程を、また同社大洗研究所では、校正に使用する各種放射線照射装置を見学しました。



(株)千代田テクノル ラディエーションモニタリングセンターにて



### (3) 各技術士会活動報告

当部会長の佐々木聡氏、茨城県支部副支部長の大脇隆志氏、JAEA技術士会の芳中一行氏、神峰技術士会副幹事長代理の久恒眞一氏、JANSI 技術士会会長の富永研司氏より、今年度の活動が報告されました。

#### <第1の柱> 部会活動事例(3)

### 部会協力の本部 CPD 講座等と情報発信

企画担当

副部会長 井口 幸弘



技術士法第47条の2により「技術士は、常に、その業務に関して有する知識及び技能の水準を向上させ、その他その資質の向上を図るよう努めなければならない。」ことが定められており、この責務を果たすことを支援するため、日本技術士会では、CPD（継続研鑽）を推進しています。当部会でも、発足以来、この一環として、講演会の開催、見学会、教材の作成等に取り組んできています。

技術士会本部の CPD 支援活動としては、CPD 中央講座（テーマを持った数件で合計 4 時間程度の講演会）、CPD ミニ講座（1 テーマ、約 2 時間、1 講師による講演）等があります。

今年は東京電力福島第一発電所事故から 5 年という節目でもあり、1 月 13 日には、日本原子力研究開発機構、楢葉遠隔技術開発センター、モックアップ試験施設部長、川妻伸二氏より「原子力ロボットと東電福島原発事故」との題したミニ講座が、3 月 12 日には中央講座として、「東電福島原発サイト内の現状と課題、リスクと戦略プランの背景を理解する」と題して岡本孝司東京大学教授

より基調講演が、大西有三関西大学特任教授より「汚染水の問題とその対策の状況を理解する」、鈴木俊一東京大学特任教授より、「廃炉に向けた燃料デブリの取り出しに関する課題を理解する」と題して合計 3 名の専門家による講演会が開催されました。なお、当部会もテーマの設定や講師の選定等に積極的に協力しています。

これらの講演会では、我々部会員だけでなく、他部門の技術士も含めて、大変多数の参加者があり、積極的な質問や意見が出されて議論が交わされており、単に最新の技術的な知見を得られるだけでなく、部門間の交流にも大いに役立っているものと自負できます。

また本年は、本部の講演会だけでなく、部会主催の講演会や、5 月に予定している福島第一発電所の見学会についても、講演内容や見解等をまとめ、月刊『技術士』に計画的記事を投稿し、技術士を主な対象として情報発信を行っていくことを部会として決定しています。

具体的には、8 月号で全体構想を示した記事を掲載することを皮切りに、7 回程度のシリーズ記事を予定しております。

さらには、これらの記事の情報源を部会として整理し、部会 HP を活用して、解説・情報発信を図っていく予定です。

これらの活動は、[部会の活動方針](#)である「技術士の認知度向上と技術士増に向けた活動」、「広報活動」、「安全文化醸成に資する活動（3.11 事故の反省を風化させない働き）」にも直結するものであり、時宜にかなったものと考えられます。

部会員の皆さまの積極的な参画、ご協力を是非お願いいたします。

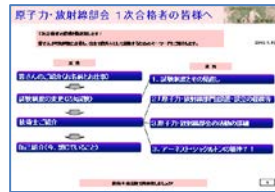


## ＜第 2 の柱＞ 取組み事例(1)

### 一次試験合格者の集い

総務担当

副部長 亀山 雅司



一次試験合格者歓迎は 1 月の例会のあと、20:00-21:00 に実施しており、今年は 7 名の方に参加頂きました。

大変短い時間ですが、参加頂いた皆様にご挨拶だけでも多くのものを持って帰って頂きたいと考え、2 点に重点をおいています。まず、試験に効く情報とそのありかです。原子力学会の HP に試験解説があること、2 月に試験講習会があること、試験講習会では昨年技術士に合格したばかりの講師から最新の受験情報を個別に聴くことができることなどです。歓迎会では、今年は勉強の仕方、業務履歴の書き方、博士と技術士の論文の書き方の違いなどのご質問がありました。業務履歴は「机上業務でも該当しますか?」「転勤で業務内容が変わってしまいました」など聴いて初めて分かるご質問と思います(大丈夫、記載できます)。来場したから分かった、来てよかったという声を頂いています。

もう一つは技術士合格に向けた安心と繋がりで、会が始まるとできるだけ受容的な流れを形成した後(私はラポールと呼んでいます)、最初にお名前、お仕事を共有頂いています。皆さん、様々な動機、背景、環境のもとで前に進んでいこうとされています。仲間の状況を共有することで、自分の目標をブレなく安心感を持って目指して頂ければと思います。これから二次を受験される皆様は「どうやれば合格できるか」ではなく「いつ合格できるか」です。技術士会で皆様と再会できますこと、楽しみにお待ちしております!

※一次合格者の皆様は技術士会準会員として活動に参加頂くことも可能です。

## ＜第 2 の柱＞ 取組み事例(2)

### 第 6 回技術士制度・受験講習会報告

第 6 回技術士制度・試験講習会(主催:日本原子力学会主催、共催:日本保健物理学会)が 2016 年 2 月 6 日(土)に行われ、45 名が参加しました。例年の約 2 倍の参加者に、「技術士」への関心の高さが伺えました。

本講習会には、先輩技術士として部会員が多数、協力しました。今年度は、例年よりも多くの参加があり、合格に向けた熱い意思の中、講習会が進められました。

初めに、体験談等を含めた学習法等の講義が行われました。質疑応答後、志望する専門ごとに個別相談会が行われ、さらに詳細な、質疑応答が行われました。

講習では、諸先輩が学習に使用した資料、参考にした HP の紹介、モチベーションの維持等の紹介等が実施されました。質疑応答では、各ブース、遅くまで質疑が行われ、より丁寧な指導が行われる様子が見られました。

また、受講者同士でよい刺激を受けた人も見受けられました。今後の試験対策に役立ててもらい、合格通知が参加者全員に届いてほしいと願ってやみません。詳細は、[日本原子力学会 HP](#) 内報告をご覧ください。



(講習会の様子)

### 講師から寄せられた感想・メッセージ

講師として協力された技術士（原子力・放射線部門）の方から感想・メッセージを頂きました。

#### 講習会に参加して

小宮 雅男（講師）



思いもかけず、講習会への協力のメールをいただきました。技術士の資格を取って 5 年たちますが、部会、CPD への参加もほとんどしておりませんでしたので、わたくしにできることなのかが気になりましたが、ご協力するのは「個別質問、相談コーナー」とのことなので、何かお役に立てればと、お手伝いすることにいたしました。

わたしの出番は、資格取得の体験談、効率の良い学習法等のプレゼンテーションの後でしたので、最近資格を取られた方々の鮮度の良いご説明などを感心して拝聴いたしました。当日は、用意された部屋が満室になるほど技術士志望の方が来られ、一言で表すと講習生、講師共に「熱い」講習会であったように思います。

わたくしの担当のコーナー「放射線利用」にも相談者が来られましたが、一次試験を通り、実務経験をこれから積む方でしたが、技術士を目指す熱意が十分感じられ、こちらも逆に更なる研鑽を促されるような雰囲気でした。質疑応答で、技術士資格取得のメリットに関する質問があった場合、原子力・放射線分野が、いまひとつ、社会的認知がされていないので、どのように回答するかが気がかりでしたが、相談者の熱意は、彼らが仲間入りすればそれも霧消するとの思いを抱かせる講習会でした。

#### 講習会を通じて考えたこと

溝口 真樹（講師）



講師の立場での参加でしたが、私自身、他の技術士の方々からのお話を聞くことができ大変勉強になりました。恥ずかしながら私自身は初参加でしたが、本講習では技術士の方々から試験対策や体験談など生の声を聞けるという点、また、質問、相談などのコーナーも設けられ、そこで技術士の方々にいろいろな相談できる点で有効性を感じました。私自身が技術士を目指していた時は勉強方法だけでなく様々な疑問や不安がありましたが、相談できる相手がいませんでした。このような疑問や不安が少しでも解消できる機会があるという点に大きな意義があると思いました。

発表に関して私は「記述試験の心構え・体験談」を担当し、勉強方法、情報収集のアプローチの仕方、それと私自身が実践した心構えを中心に話をさせて頂きました。が、他の技術士の方々の発表と比較し、少々精神論的な話が多かったように思え、もう少し具体的な試験対策の話の方が良かったのではないかと発表後に反省しました。そのような私の話を熱心に聞いて頂いた受講者の方々に感謝します。私の話の中から少しでも参考となったものがあれば幸いです。私も受講者の方々に負けぬよう引き続き自己研鑽していきます。

最後にこのような貴重な場にお誘い頂きありがとうございました。



### ＜第2の柱＞ 取組み事例(3)

#### 平成 27 年度合格新技術士講習会

平成 27 年度原子力・放射線部門合格者を対象にした講習会が 4 月 15 日(金)13 時～17 時、葺手第 2 ビル(神谷町)で行われ、二次試験合格者 19 名のうち 7 名、総監合格者 5 名のうち 1 名が合格者として参加されました。

今年度は、昨年度一次試験合格者として参加していた二次合格者、二次合格者として参加していた総合技術管理部門合格者が 2 年連続合格者として出席。これは昨年度「参加してよかったから、また合格者として参加したい！」という気持ちが今年度の合格につながったのではないかと推測しています。この講習会が技術士試験合格までのモチベーションになりえるのではないかと、今年度の参加者がまた来年度も出席するといったような喜ばしい現象が生じるのではないかと期待しています。

参加後のアンケートでは、「合格がゴールではなく、スタート。講習会に参加し、気持ちが引き締まった。」「技術士会・部会を通じ、広い分野での交流ができることを期待している。」といった感想が寄せられました。

講習会後の懇親会ではサプライズスイーツも登場し、祝賀ムードに花を添えました。先輩技術士との親睦を深めるだけでなく、同じ部門の技術士として、意見交換もおこなわれてとても充実した懇親会となりました。



### ＜第2の柱＞ 取組み事例(4)

#### 各機関の技術士受験者増の取組み 【第三弾】TPSC技術士連絡会

各機関で実施されている技術士受験者数および技術士数増の取組みを紹介していきます。神峰技術士会(部会報第 16 号)、JAEA 技術士会(同第 17 号)に引き続き、今回は三例目の事例紹介となります。

#### 1. はじめに

TPSC(東芝プラントシステム(株))技術士連絡会の私の所属部門では、平成 22 年(2010 年)度より技術戦略の一環として技術士取得を目指し、業務の関係上、原子力施設のエンジニアリングや施工、試験関係等に照準を合わせたセミナーを開催してきた。受講者の半数以上は原子力・放射線部門で受験しているが、原子力施設のエンジニアリングは電気電子・機械・建設等、多岐にわたっているため、各選択科目の受験者がお互いに情報を共有できる形で実施してきた。

会員 天田 佳孝



#### 2. 一次試験への取り組み

技術系新入社員(JABEE 認定課程修了者を除く)には技術士一次試験の受験を義務付けている。また原子力関連部門では、新入社員とは別に業務経験を持つ一般従業員に対しても技術士取得を推奨し受験申し込みのフォローから、受験に向けて一次試験専用のセミナーを科目ごとに開催してきた。セミナーの内容としては、合格者の体験談発表、科目別に過去問題の解説及び模擬試験を実施している。

#### 3. 二次試験への取り組み

二次試験受験可能者(受験者リストを作成しピ



ンポイントで案内、召集) に対し、受験申込のフォローから、二次試験専用にセミナーを概ね 1 回/月で開催してきた。セミナーの内容としては受験申込書記載要領から過去問の解説及び論文作成指導(添削実施)等を実施してきた。例えば、短い時間にアレンジした記述模擬試験で実訓練を行い、回答回収の後、次回にその良かったところと、そうでなかったところの総括を、参加者の情報共有で行うことなどである。特に相互啓発として受講者に対して毎年良い刺激となり、合格者の体験談とその勉強方法、モチベーションの維持方法等大いに参考になっている。

#### 4. 受講者から講師へ

所属部門では、一次試験を十数名、二次試験では複数名輩出できるよう努めてきた。私は、最初セミナーの受講者側でスタートし、技術士になってからは講師側に回ったが、自分の経験上、特に二次試験においては、論文添削の重要性を説明し、大勢の受験者の論文を添削してきた。この経験をもとに近年では、技術士増の部会他活動にも参加させて頂いている。

#### 5. さいごに

私が受講者側だった時も講師(先輩技術士 2 名)の方から交互に添削戴き修正しました。論文を修正するたびに何度もコメントを受け、当時は少々受け入れ難かったのですが、修正するにつれ最初の論文より数段良くなっていくのを実感出来、合格できた一番の要因だと今でも思っています。

我々の活動が各職場や団体において参考になり、原子力・放射線部門全体の技術士増につながることを願っています。

## 会員、例会参加者の声

新入会員の方や例会に数多く参加頂いた方を中心に、今回は 4 名(2 名は新入会員)の方に御意見を頂きました。“次回は自分が”と思われた読者の方からの積極的な御意見、お待ちしております。

新入会員

齊藤 勇

私はこれまで主に各種放射線検出器の開発やシステム設計、評価などを行ってきました。

ある日、上司の勧めで技術士の資格を知り受験しましたが、全くの実力不足で当初は何度やっても合格せず、周りのご指導頂いた方々が呆れ果てた頃ようやく指導頂いた結果が自分の身に着いてきたのか、この度放射線防護にて合格させて頂き、本年度より本会員となりました。

時代の流れを考えると、今後原子力・放射線部門の技術士はこの分野に関連するリスクコミュニケーションが強く求められます。その為に専門とする事項だけでなく、原子力・放射線部門としてのマクロな視点と見解が求められることとなります。

しかし原子力・放射線部門は原子炉システムの設計及び建設から放射線防護まで多岐に渡り、一人ですべてを深く網羅するには限界があります。その解決の一つとして、この部会を通じて多くの方とお会いして自分も含めたお互いの技術の交流ができればと思います。

この度は晴れて技術士となりましたが今後与えられた課題を解決するために、何度試験に落ちてもしつこく試験勉強をしていた頃を忘れずに継続研鑽をしていきたいと思っています。

## 新入会員

竹内 知輝

この度、原子力・放射線部門の技術士となりました竹内知輝と申します。現在はウラン加工施設で生産技術に関する業務と新規制基準対応の業務に携わっています。

これまで試験合格は一つの目標でしたが、合格はゴールではなく、重要なのは技術士として今後何を成すかです。合格後しばらくは喜びに浮かれていましたが、そろそろ気を引締め直し、継続研鑽に励んで公益に繋がる成果を出せる様努力して参ります。

原子力に対しては賛否両論ありますが、私は原子力の安全向上と利用推進は必ず公益に繋がると信じています。

原子力の将来がどうなるのかまだはっきりとは見通せない状況ですが、それを明るくものとするために微力ながら貢献していきたいと思えます。

## 会員

「安全文化醸成活動に思う」 網野 真樹

私は現在、所属部署で品質・環境・安全等に係る I S O の運用の業務を担当していますが、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災による直後の福島第一原子力発電所事故以降、当方が所属する部署も、その後大きく変化した原子力規制、関連法規（新規制基準等）への対応に、追われているような状況がこの 5 年間は続いている感じですが、安全等につきましては、会社として、社長の陣頭指揮のもと「安全と健康を守ることは全てに優先する」を基本理念として掲げ、全社的な安全衛生活動を展開しております。これまでの活動を大幅に見直すきっかけは、2015 年 1 月 9 日に三重県四日市の工場で起きた爆発火災事故の発生です。この事故の反省と教訓から、安全管理体制の再構築と拡充が図られているところです。また、事故を風化させないために

同日は、社内で「安全誓いの日」に制定されています。当部署でも安全活動の P D C A サイクルを回すために、昨年から本格的に安全文化醸成活動を展開し始めました。独自の取り組みとしては、安全とともに健康に関する意識向上活動も併せて実施している点です。例えば、毎朝のラジオ体操にて、同僚のその日の動きを観察し、体調等に関して気付いたことを述べるなどの工夫に取り組んでいます。「健全な魂は健全な肉体に宿る」のことわざどおり、健康で働きやすい日々の職場環境づくりが安全文化醸成の基盤につながると考えています。

各務 正比古

例会参加者  
(二次試験合格者)

日本原子力発電の敦賀発電所に勤務しております各務正比古(かかみまさひこ)と申します。会員ではありませんが、例会に参加させていただいているご縁で、一言述べさせていただきます。



私が例会に参加する目的は情報の収集です。敦賀発電所は長期停止中であり所員の士気の維持向上が重要です。私は原子力保安の監督者として、所員と積極的なコミュニケーションを図ることで対応しています。こちらから話しかけることをきっかけに、相手の話す将来の心配事や日常の不満を傾聴し、お互いの意見を交わす中で、共に頑張るこの難局を乗り越えようという連帯感が生まれる、という図式を描きつつ悪戦苦闘しています。ただ、コミュニケーションといっても何か話のネタが必要です。それを入手するのにうってつけの場所が例会です。会員の方には分からないでしょうが、私にとって例会は様々な情報の宝庫です。これをもとに考えれば話題を広げることができ、大変重宝しています。

ただ、例会では説明が大半で質疑や議論が少ないところから、会員が互いに切磋琢磨する場所になっているかどうかを危惧しています。是非貴重な場を有効活用してください。

私は東京以外の勤務地として、発電所のある福井県敦賀市と使用済燃料中間貯蔵施設建設地の青森県むつ市に住み、仕事関係で住民の方々とのコミュニケーションしましたが、うまく行かないことも多くありました。

自分の説明方法を改善すべく、自分なりにリスクコミュニケーションを勉強しましたが、万能のものではなく、相手に合わせて一つ一つ手作りしてお話するしかありませんでした。結局、その原因として自分があまりに彼らのことを知らなさ過ぎることに思い至りました。

考えてみれば、住民の方々も千差万別であり、大別しても好意的な方、批判的な方、(特に原子力を考えることもなく、状況次第でどちらにもすぐなれる) 大多数の無党派とあり、職業や経歴により更にバリエーションが増えます。それをまとめて説明しようというのだから無理な話だったと今にして思います。

まずは、少しでも住民の方々、一人一人とのお付き合いを深め、私という人間を知ってもらうところから始めようと思います。

決して学問ではない、現場での具体的対応についての意見交換が狙いです。事業者のみならず、規制者、メーカー、研究機関に属する技術士が対等な立場で議論し、安全文化に対する意識を高めることは、例えばここで得られたこと、感じたことを各地域や組織内に持ち帰り、そこでリーダーとして模範を見せることは広く社会に貢献する大きな一歩になると考えます。

## S 幹事案件と募集

役員の職務を特別に補佐する部会員を S 幹事\* と称し、部会組織の一部として昨年度に設置、現在 12 名の方に、主に部会 10 周年で掲げた今後 10 年の部会活動方針を踏まえた新プロジェクトに協力頂いています。

至近で進める案件(下表参照)に協力頂ける方、また部会全体の活動に役立ちたいとお感じの方、例会への参加だけではなく役員と一歩近い位置で部会活動に参加したいと胸の内に秘めている皆様からの積極的な応募、お待ちしております！(応募案内と案件の詳細、申込みフォーム：→[こちら](#))

### 至近で進めるプロジェクト(PJ)例

1F 事故収束状況一般向け解説 PJ (No. 004)	発表されている事故収束工程に対し、クリチカルを逸脱するリスクの高い問題は何か、現行の技術でできることとできないことの課題は何か、専門外の技術者が理解できるレベルで解説する。具体的には月刊「技術士」ヘシリーズで投稿する。執筆内容(自身もしくは推薦の場合は調査・調整する)、解説プロジェクトチーム及び役員会等にてチェックフォロー、スケジュールに沿って本部広報委員会へ投稿。
原子力・放射線に関わる時事問題の一般向け解説 PJ (No. 005)	原子力事故に対する情報が氾濫する中、技術士として信頼できる情報の選別、その根拠などについて、高校生が理解できるレベルでHPに掲載する。①情報収集とそのまとめ、②勉強会の実施。
首都圏外の学部及び大学院への技術士制度、活動の認知向上 PJ (No. 009)	首都圏の大学(学部、大学院)については原子力学会主催の説明会が定着しつつあるが、首都圏外を含めた講師派遣を行う。資料(説明キット)をもとに、各技術士にとりまとめ頂き、近隣大学へ同説明会を实践。
1F 事故要因に関わる文献調査・部会員意見発信 PJ (No. 011)	公開された東京電力(株)福島第一原子力発電所元所長の事故調ヒアリング内容の部会員個々の意見発信(感想表現)可能な場をもうけると共に、情報集約による部会ポテンシャルを内外に示す。具体的には、部会報、部会HP などの発表を行う。

\*S 幹事(S: special, support, senior, 相談役...) という名は当部会特有の俗称となります。(詳細は[会報第 17 号](#) P. 10 を参照ください。)



## S 幹事就任

### 乗物 丈巳



きっかけは、技術士制度・試験講習会でした。第 4 回から参加させていただいておりましたが、取り纏めをされていた前任者の職場の異動に伴い、引き継ぎの打診と、併せて S 幹事の説明を受けました。私は技術で社会に貢献したいという思いのもと部会に入会していました。しかしながら、これまで部会活動に参加することがあまりできておりませんでしたので、これを機会と考えてご推薦をいただき拝命するに至りました。

さて私が思う S 幹事の魅力ですが、①役員活動が身近になり、刺激を受け触発されること、②自己の経験を生かして技術士のすそ野を広げる一翼を担えること、③役員会の出席など定常的な義務がないため、業務に支障なく対応できること、です。また就任以来、自己の技術力と倫理感を高めるよい研鑽の機会をたくさんいただいております。

S 幹事の S は、Special、Support、Senior などさまざまです (S 幹事についての詳しい説明は、部会報第 17 号を見てください)。部会活動に参画したいがこれまで機会がなかったと思っている方々など、是非一度、S 幹事について考えてみていただければ幸いです。

### 山田 基幸



みなさんはじめまして、この度 S 幹事になりました山田基幸と申します。私は 2004 年の一次 (原子力放射線部門第一回)、2005 年の二次試験を経て技術

士登録しました。当時、技術士のことは何故か知っていましたが、部門の新設とその趣旨を聞き、技術者倫理を備えた誠実で社会と共生する技術者の証として必携の資格だと考え受験しました。実はその後しばらくして、数年前に実家で本棚の整理をしていますと、棚奥から技術士の資格取得を勧める古い本が出てきました。すっかり忘れていましたが 30 年程前にコンサルタントエンジニアに憧れて本を買ったことを思い出し、このことで技術士を知っていたのかと納得できましたが、同時に、様々な分野により貢献したいと考えるようにもなりました。そういったことや東京での勤務に異動したこともあり、部会活動に協力したいと応募した次第です。どの程度貢献できるか不安もありますが、どうぞよろしく願いいたします。

### 曾佐 豊



このたび S 幹事に認定していただきました曾佐と申します。原子力・放射線部会の活動にお役に立てるよう出来る限りの協力をいたしたいと思っておりますので、

よろしく願います。

これまでの経験としましては、原子力プラントメーカーで高速増殖炉、沸騰水型原子炉の原子炉機器設計に 33 年従事した後、原子力安全・保安院、原子力規制庁で原子力保安検査官、高経年化技術評価等に従事してきました。

部会の活動につきましては、一昨年 3 月末に退職後、技術士会の行事等に参加させていただいた経験しかありませんが、原子力発電に関しての経験等を生かしまして、「福島第一原子力事故事象の理解から終息への道筋調査」プロジェクト等に貢献したいと考えています。

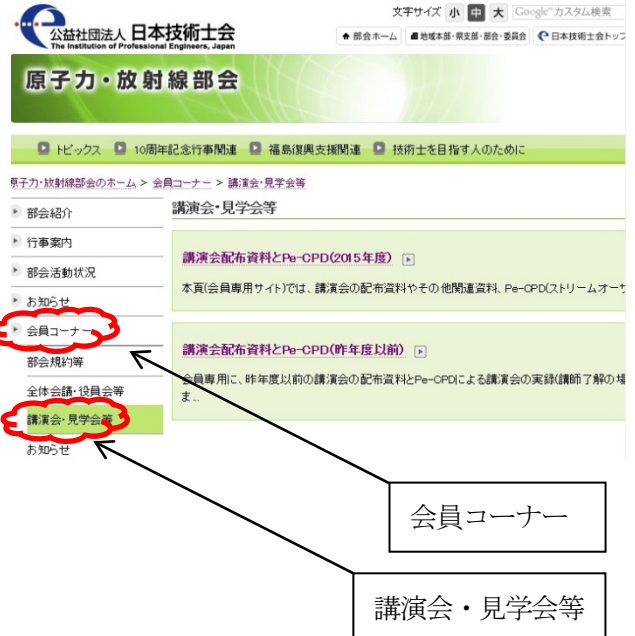
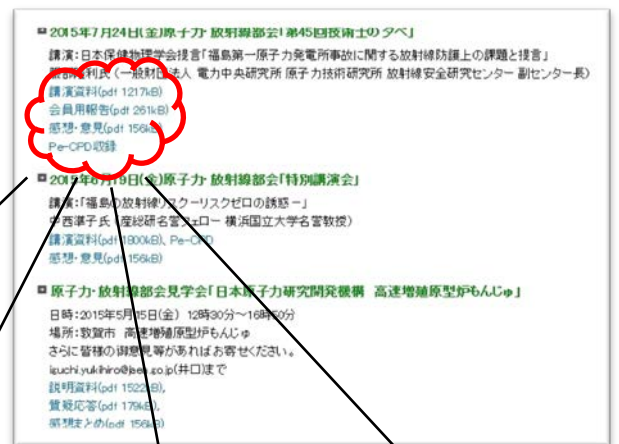
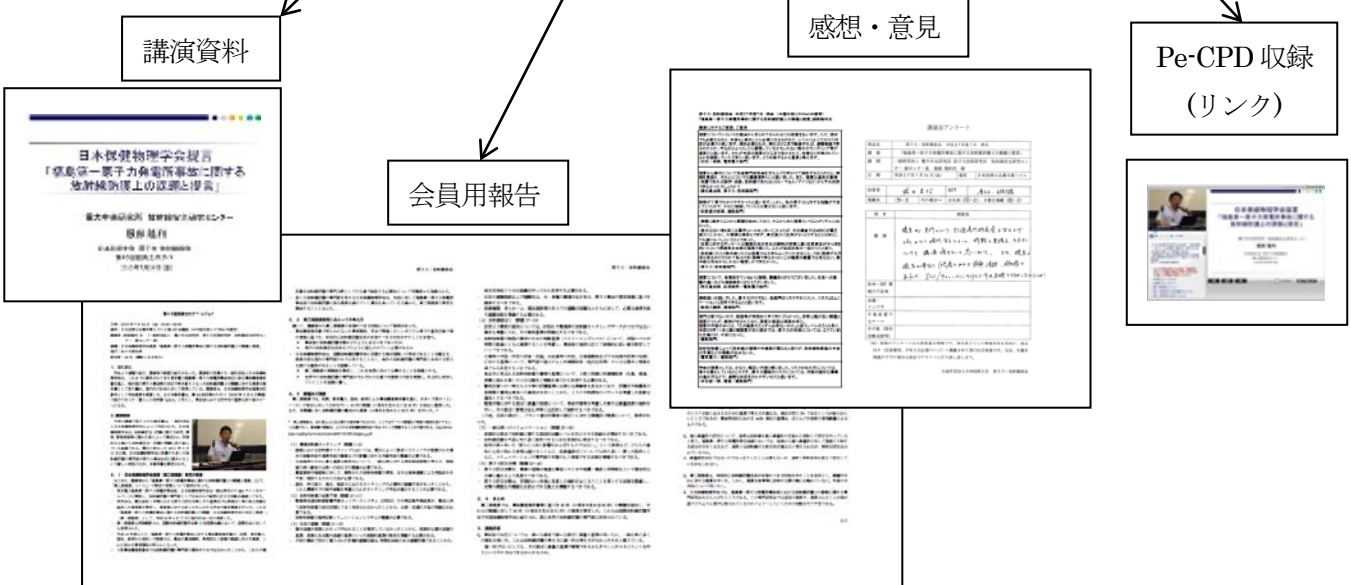
## 部会HPの紹介

部会が運営するホームページには、多くの有用な情報が掲載されており、具体例とその活用方法を紹介します。今回は、過去に実施してきた講演会他情報のアーカイブについてです。

部会例会（技術士のタブ）や見学会には毎回多くの方に参加頂いていますが、参加された方はもとより、興味を持たれながらも仕事の都合や開催場所との関係から参加を見送られた方もおられることでしょう。そういった会員の皆様には、会員コーナー「講演会・見学会等」（→[こちら](#)）をお薦めします。

講演者から提供頂いた説明資料、会員向け実施報告、参加者の感想、また本部との連携によるPe-CPD（ビデオ録画）の視聴が可能です。いずれも会員限定で許可された範囲の情報となりますが、終了した講演会の内容を把握したい場合や、参加したけど聴き逃したところを再確認したい場合などに活用できます。

（これらの閲覧には技術士会会員番号とパスワードが必要となりますので御確認下さい。）

## 2015年度下期 活動実績

## (1) 役員会

- ・2015年11月20日 第5回役員会
- ・2016年1月15日 第6回役員会
- ・2016年3月4日 第7回役員会

## (2) 継続技術研鑽

## ① 技術士の夕べ

- ・第47回技術士の夕べ (詳細は[こちら](#))  
 日時：2015年11月20日(金)  
 講演：原子力技術の信頼性を回復するには  
 講師：藤田 玲子氏
- ・第48回技術士の夕べ  
 (詳細は[こちら](#)、会員の方は[こちら](#))  
 日時：2016年1月25日(金)  
 意見交換会：安全文化に関する意見交換  
 (畑孝也氏、桑江良明氏、雨夜隆之氏、渡辺文隆氏)
- ・第49回 技術士の夕べ  
 日時：2016年3月4日(金)  
 意見交換会：住民目線のリスクコミュニケーションを考える② (事例研究)  
 講師：大場恭子氏

## ② 見学会

- ・北関東地区 見学と報告会 (会員の方は[こちら](#))  
 日時：2016年1月29日(金)  
 場所：㈱千代田テクノ大洗大貫台事業所、  
 ラディエーションモニタリングセンタ、  
 大洗研究所

## (3) 部会員の投稿

- ・「高速増殖原型炉もんじゅ見学報告」、月刊「技術士」、【CPD 行事から】、2015年10月号、横堀 仁 (記事は[こちら](#))
- ・「福島第一原子力発電所事故に関する放射線防護上の課題と提言」、月刊「技術士」、【CPD 行事から】、2015年11月号、山外 功太郎 (記事は[こちら](#))

## 2016年度上期 活動予定

- ・2016年6月24日 全体会議

特別講演：「レジリエンスエンジニアリングの視点から見た東日本大震災時の原子力発電所の対応と教訓」

講師：北村正晴氏 (東北大学名誉教授)

- ・2016年7月22日 第50回技術士の夕べ

講演：「東電福島第一発電所廃炉に伴う廃棄物の処理処分の課題、研究開発の状況 (仮題)」

講師：宮本泰明氏(日本原子力開発機構 福島研究開発部門 廃炉国際共同研究センター)

- ・2016年9月16日 第51回技術士の夕べ

講演：「福島支援活動の経験と技術者・研究者のあるべき姿 (仮題)」

講師：中西友子氏 (原子力委員会 委員)

以降の活動予定は、

[原子力・放射線部会のホーム](#) > [行事案内](#) > [CPD/行事案内](#)

を適時ご確認ください。

- ・月刊技術士 共通技術 掲載予定



## &lt;編集後記&gt;

東日本大震災から5年目の春を迎えました。今年4月には熊本での大地震もあり、改めて防災に対する備えを忘れてはいけないと思い知らされました。

復興への道のりは容易ではありません。建物、道路が整い一部生活など落ち着いて見えることがあっても心の中の平穏はまだまだ遠い道のりだと思っています。自分の心の中にあるものを言葉にすることは、とても大変な事です。感情をあらわす言葉がぴったり見つかることも稀ではないでしょうか。また言葉にすることができても、相手がどのように思うのか、理解してもらえるのかという新たな問題も発生します。住民目線のコミュニケーションは、一方通行では成り立ちません。

今年も夏になるとあの畑ではきっとひまわりが咲くでしょう。背筋を伸ばして天を向くには、地面にしっかり根付く必要がありますし、根付いても水が、足りないと萎れてしまいます。肥料は知識や情報、水は内側から支えやる活力だと考えると、寄り添い、何が必要か耳を傾け、その上、様子を見て本当に必要な事は何かを求める事が住民と同じ目線に立ったコミュニケーションの第一歩ではないでしょうか。花の種類だけでなく同じ花でも状況によって必要としている事は違います。少しでも気持ちよく心の花が咲きますように。できればさらに次世代の種を育むことができますように。

(おわり)



## 「今後10年の活動方針」と「8つの新しいプロジェクト」

### 原子力・放射線部会の過去10年を振り返っての今後10年の活動方針（活動の方向性）

- 第1の柱：3/11事故を風化させることなく、原子力安全の基盤となる安全文化醸成に資する活動を行う。  
 第2の柱：技術士の制度活用を実現に向けた、技術士の認知度向上及び技術士数増に向けた活動を行う。  
 第3の柱：部会員の技術士活動が効率的に行えるよう必要な支援を行う。  
 第4の柱：広報活動

### 8つの新プロジェクト：「今後10年の活動方針」を踏まえた平成26年度下期以降の活動計画

- I. 3.11事故の反省・教訓を風化させない働きかけ、安全文化醸成に資する活動
1. 原子力・放射線部門の技術士として、安全文化と技術者倫理を学び直す取り組み
  2. 部会員の福島支援活動の経験から、住民目線のリスクコミュニケーションを考える
  3. 1F事故事象の理解から収束への道筋の調査（仮題）
- II. 認知度向上、技術士増（各機関の技術士増加策の調査、大学での技術士紹介等）
4. 各機関の受験者増の取り組みの具体事例の紹介
  5. 原子力関連学部学科・大学院への技術士制度説明会の実施
  6. 原子力学会の小中高教科書におけるエネルギー・放射線関連記載に関する調査協力の紹介
- III. 部会員の技術士活動の支援
7. 原子力・放射線関連の時事問題の解説と、説明のための指標等の作成
- IV. 広報
8. 地域本部のWEB中継を利用した関東地区と他地域の技術士との連携